

産経新聞 正論

平成 21 年 1 月 15 日掲載

「iPhone 新聞」は便利だ

公文俊平

iPhone が、まさに常住坐臥というか、どこにでかけるにも手放せない生活の伴侶となつてから何か月かになる。そこそこの大きさの画面に加えて文字や画像をかなり自在に拡大できるこの道具は、老来視力の落ちた私にも十分使える。青空文庫から漱石の主要な作品をダウンロードして、電車の中やベッドで読むというのが、いまの私にとっての iPhone の最大の用途である。混雑した車中でも片手でページがめくれるのがありがたい。

この iPhone で今度は産経新聞が読めるようになった。最初は新聞一ページ全体の画像から記事を選ぶなんて現実的ではないかとも思ったのだが、実際に使ってみるとなかなかどうして、けっこう便利なので愛用している。実は、私のいまの視力だと、普通の新聞を広げても楽に読めるのは見出しくらいのもので、なかなか記事の中身を本気で読もうという気になれないのだが、これだと記事そのものが気楽に読めるのである。伝え聞くところでは、産経のこの試みは大好評だそうだが、それもそのはずだと実感させられた。

しかし、これをたんなる無料サービスにとどめておくのは、いかにももったいない。読ませてもらう方としても申し訳ない。感銘を受けた論説や、有用な調査記事などに対して、自分が納得するなにかの金額を払える仕組みをぜひ導入してほしい。その分が、iPhone の毎月の使用料金に上乗せされるようになればよいのである。

さらにいえば、お薦め記事のページもあって、毎日何本か、これはと自負する記事や、これは世に問いたいという論説などを産経の方で選び、読者はワンタッチでそこに飛べるようになっていると、なおありがたい。

一人の読者としての率直な気持ちをいえば、広告の有用性を否定するつもりはないにしても、広告料金でコンテンツの費用をまかなうといういわゆる「広告モデル」は、もういかにげんに願ひ下げにしたい。それよりも、記事の中身に対して、記者や編集者をはじめとする新聞社のみなさんの労苦と創意工夫に対して、応分の感謝の意を示す仕組みがほしい。

よく指摘されることだが、商品としての情報や知識、とくにデジタル化されたそれは、売り手には妥当な価格がつけにくい。そのコピーを作って配信するための追加費用はほとんどゼロなので、競争市場でのその価格もかぎりなくゼロに収れんしていかざるをえないが、それではモトがとれなくなってしまうからである。他方、買い手の側からする情報や知識の評価は、人によって千差万別で、買い手が競争すれば一定の客観的な相場がつくはずだともいえない。特別な場合にはいわゆる「お布施の相場」ができることもなくはないだろうが、デジタルの世界ではそれはあくまでも例外にとどまるだろう。そうだとすれば、買い手は自分が妥当と思う対価を払い、それがいくらであつても売り手は文句を言わない

という社会的な約束がなりたってくれるのを期待するしかない。

同じようなことは、もともと商品として生産・流通させられていない情報や知識、つまり、ブログやウェブサイト上の公開情報などのような、私のいわゆる“通識”に対してもあてはまるだろう。いくらそれを喜んで無料で提供しますといっても、そうするためにはそれなりの費用がかかるという事実は否定しようがない。また、それを通有する側が、それなりの便益をえたり感動をおぼえたりする場合も少なくないという事実もこれまた否定できない。それはこっちの話であって、タダで入手できるものに代価など払うことはないという考え方は、社会的に好ましいとはいえない。他方、“通識”を提供する側も、受け手がそれにたいして感謝の気持ちを物心両面で示してくれる仕組みを無用視することもないだろう。

これからの情報社会が、商品として提供される知識や情報と通識として提供されるそれとの間のバランスをうまくとりながら発展していくためにも、そのような仕組みがだれにも使える標準的な形で作くり上げられ広く普及していくことが望ましい。少額の送金と課金の仕組みが、安全で確実に、しかも安価で便利に作られるとよい。産経新聞には、今回の「英断」をきっかけとして、さらにその一歩先に進むための方策を、関係各方面と共働しながら、一日も早く実現してほしいものである。